

## 保育活動における「援助」について

浜 野 兼 一

Hamano Kenichi

キーワード：保育者養成、保育活動、援助

### はじめに

本稿は、保育者養成に係る研究の一環として、「援助<sup>1)</sup>」に対する一般的理解や保育の場における「援助」について、保育の諸活動との関わりにも目を向けながら考察するものである。

「援助」については、例えば保育所保育の計画や内容、展開の拠り所となっている『保育所保育指針解説』において、「…子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術」「…子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術」「…気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構成の知識・技術<sup>2)</sup>」と述べ、「援助」技術が保育士の専門性に不可欠なものとしている。

一方、幼稚園教育にあっても、保育所と同様に「援助」技術は必要であり、園の様々な活動に備えるべきものである。この根拠は、『幼稚園教育要領解説』に示されている「幼児が、教師と共に生活する中で…教師の支えを得ながら文化を獲得し、自己の可能性を開いていくことを大切にした教育<sup>3)</sup>」にみることができる。ここでは、直接的に「援助」という言葉は用いられていないが、「教師の支えを得ながら」がすなわち「援助」を意味すると考えれば、容易に理解できよう。

このように「援助」は、我が国の就学前保育において重要な意味をもつものであり、保育者養成の現状や問題点、特質等をとらえ直すために考察すべきと考える。併せて、保育現場の実際の場面において不可欠ともいえる「援助」の役割や意義づけも必要となるであろう。

以上を踏まえて、本稿においては、次の三点について考察する。まず、「援助」の定義づけについて「援助」を取り巻く諸概念を踏まえて検討する。次に、保育のなかの「援助」をとらえるため、園生活における子どもの活動場面をいくつか提示し考察を試みる。さらに、保育活動の場面において求められる保育者の役割を明らかにするために、場面に応じた援助的関わりを検討する。

## 1 「援助」の定義

一般的に、「援助」という言葉は、例えば「救い助けること（三省堂『デイリーコンサイス国語辞典』）」という意味づけがなされているように、他者に対して「助ける」「支える」「救う」「手を差し伸べる」と理解されている。

本節では、「援助」に対するこうしたとらえ方を踏まえつつ、特に保育の場で用いられる技術の一つとしての「援助」概念について定義づけを行うとともに、その諸側面の一端を明らかにする。

「援助」という行為は、日常の生活場面等において、なんらかのかたちで他者が存在することにより成り立つ。その際、施そうとする「援助」の性質が、行為者の意図によって変化したり、区別される場合がある。まず、「援助」の行為者が利益を得るために行うもの、次に、これとは逆に行為者が利益を考慮せず行うもの、さらに、これらのいずれにも属さないもの、である。なお、これら3つの「援助」は、行為者の意図にかかわらず区別されたり表出する場合もある。

周知のように、我々が日々生活している社会には、様々な「援助」が存在し人間関係の支えとなっている。人と人との関わりのなかに「援助」がなければ、社会の維持が困難になると言っても過言ではない。

では、人が備えるべき社会性の一部としての自発的「援助」を想定するならば、それはどのように身に付いていくのだろうか。

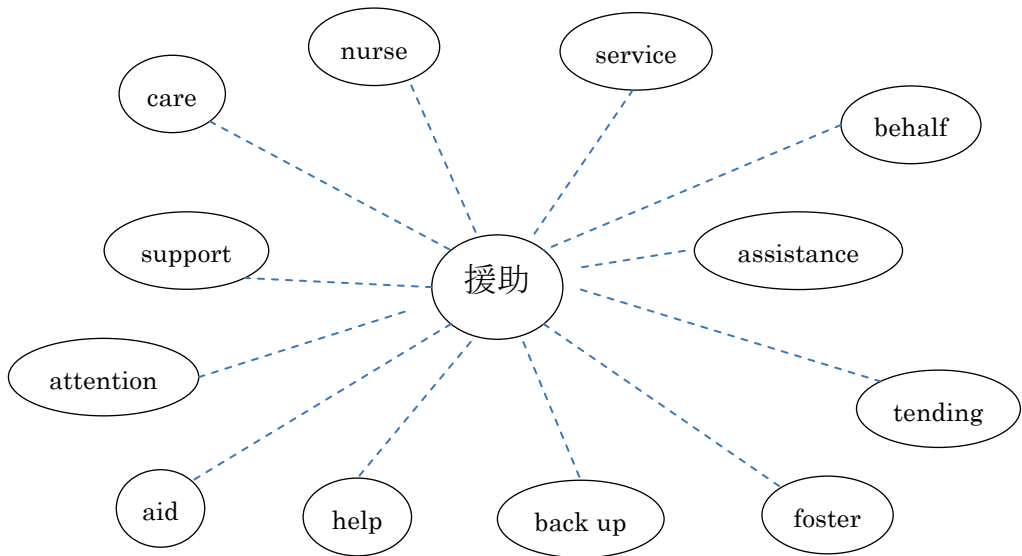
就学前の幼児のほとんどは、「援助」というものを知らない。このことから、当然ではあるが自ら「援助」行動を示すこともほとんどみられない。成長していく過程のなかで、はじめは、最も近い大人（親、養育者）の「援助」的振る舞いをみて、それを知る。幼児はこうした場面をくり返し経験することで、しだいにまわりの大人のまねをしたり、共同行動をとるようになる。そして、心身の発達に伴って「援助」行動が、それ以外のいくつかの社会的価値（思いやり、心遣い、安心感、配慮、感謝すること等）や道徳などに関連づけられることを知り、また理解できるようにもなる。

こうした過程を経て、「援助」行動がより適切なものに変化していくこととなる。しかし、「援助」行動を適切なものに変化させるには“ある条件”が必要となる。その条件とは、「援助」行動が「自発的」な行動になっている、ということである。

ところで、社会福祉援助技術においては、サービス利用者と援助者との関係を「援助関係」ととらえ、両者が対等の関係にあることが基本である<sup>4</sup>、としている。この考え方は保育における「援助」を検討する際にも、援助者と被援助者の関わりをとらえていくにあたって示唆を与えている。

その一方で、少し視野を広げて考えてみると、「援助」は、ときに support であり help でもあり、また assistance というとらえかたも可能となる。「援助」概念は多岐にわたるといえよう。

図1 「援助」をとりまく諸状況



## 2 「援助」を見据えた保育場面の提起

幼稚園や保育所における保育者の役割とは何であろうか。

それは、園生活における様々な活動を通じて、子どもたちと適切に関わることができること。これが基本であろう。子どもと適切に関わるとは、例えば“挨拶”、時には“物事の善悪”、あるいは“約束事”などを、すべての子どもたちに伝えられるような保育を行う、ということである。これらは、保育活動を行う上での基本であり、前提ともいえよう。見方を変えれば、保育者としての役割というより、養育者、援助者、大人としての役割というとらえかたが適切かもしれない。

以上を踏まえて、保育における子どもの活動場面を考えると、想定される場面は膨大なものとなるであろう。そこで本節では、保育における「援助」に目を向けつつ4つの保育の活動場面を提起する。

### ＜保育における子どもの活動場面＞

**場面①** T君（4歳児）が園庭の砂場で遊んでいます。いま夢中になっているのは“ごっこ遊び”。砂場で“ごっこ遊び”というと…、いろいろありますね。T君の“ごっこ遊び”は、よくみると砂でつくった様々なかたちのものを食べ物や飲み物として見立てているようです。この、“見立て遊び”をT君は一人で続けています。T君はまわりにいる何人かの園児に「一緒にやらない？」と声をかけましたが、反応はあまり良くないよう

です。T 君の“見立て遊び”に加わろうとする園児は、いまのところ見あたりません。

**場面②** 今日は C 恵ちゃん（5 歳児）がいるバラ組の遊びを 1 人でコーディネートする日です。バラ組の園児は全部で 20 人います。C 恵ちゃんはクラスのお友達をうまくまとめられるでしょうか。今日の遊びのタイトルは“猛獣狩りにいこうよ”です。C 恵ちゃんは比較的小となしい子ですが、責任感は一倍あります。様子をみているとクラスのみんなはそれぞれ自分の好きなことをしています。とそこに C 恵ちゃんが登場。…まずは、ルールの確認からはじめるようです。

**場面③** 登園の時間…いつも元気な Y 君（4 歳児）ですが、「おはよう」の声も小さくて元気がありません。どうしたのでしょうか？ Y 君の様子をよくみると、少しふさぎこんでいるようにも見えます。体調が良くないのでしょうか？ それともお家で何かあったのでしょうか？ 一緒に登園してきたお父さんの話しでは、急用で 3 日ほど母親が家を留守にするとのこと。これまで、Y 君は母親との関係が強かったため寂しがっているようです。

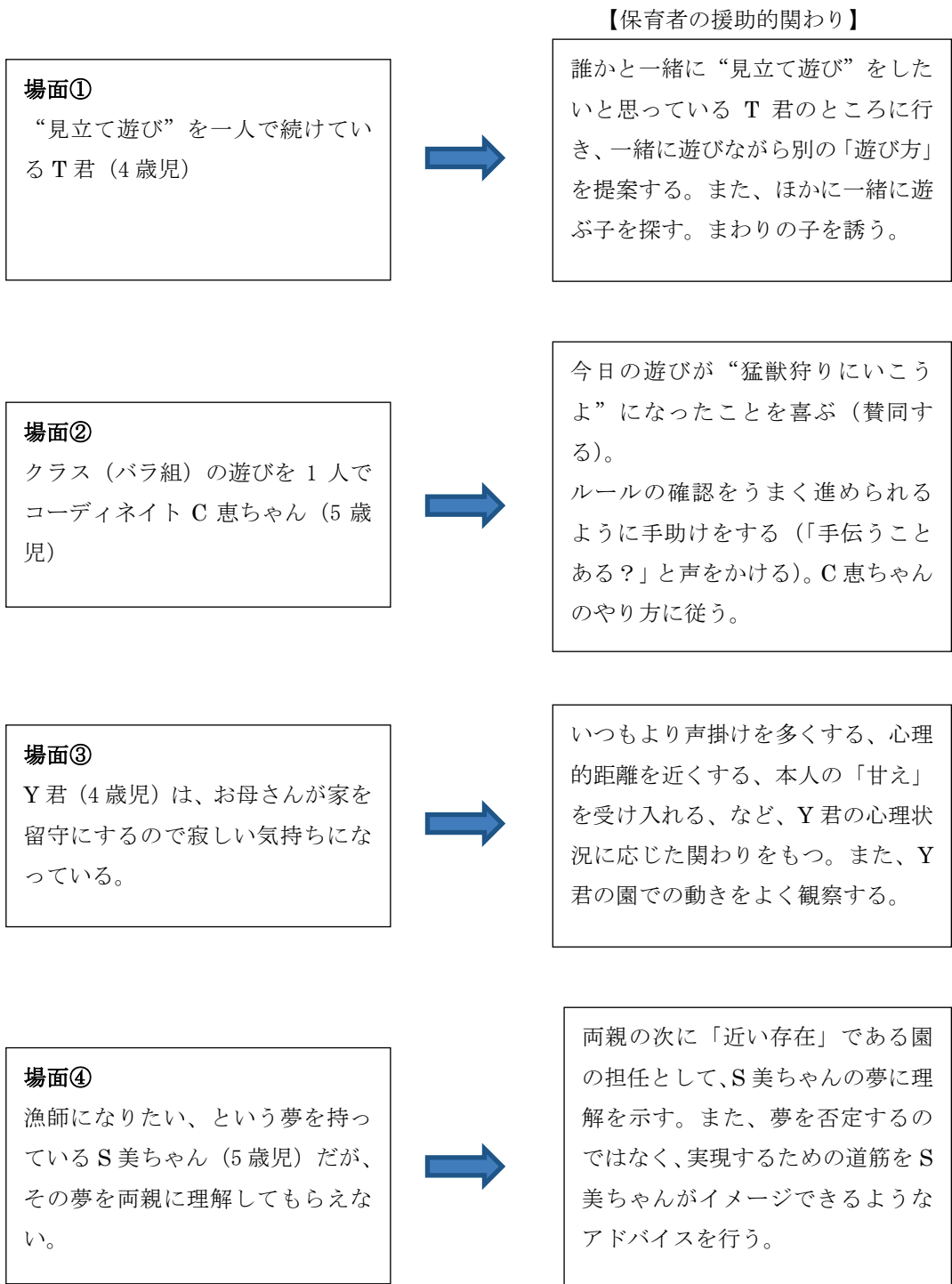
**場面④** S 美ちゃん（5 歳児）には夢があります。その夢とは漁師になることです。1 週間前、この夢をお父さんとお母さんに話してみました。でも、両親には全く理解してもらえませんでした。「女の子が漁師なんておかしい」「なれるわけない」「はずかしいから人に言わないで」などと、取り合ってくれません。予想外の展開に S 美ちゃんは困ってしまいました。親から夢のことを理解してもらえないという状況がこのまま続くと、S 美ちゃんは、自分自身が親から受け入れられていない、という感覚を持つようになるかもしれません。

以上、保育において展開される子どもの活動場面を提示したが、大切なことは、これらの保育場面（類似の場面を含む）で、保育者がどのような関わり方、立ち居振る舞いをするか、である。次節では、この点について検討する。

### 3 求められる保育者の役割

保育者は、園生活のなかで園児への「援助」が求められる場面において、どのような動きが求められ、また何を期待されているのだろうか。

前節で示した保育の場面に保育者が関わるということを想定して、具体的な動きを挙げながら検討する。場面①～④に保育者が“援助的”に関わる場合、例えば次のようなアプローチが想定されるであろう。



上記に示した各場面を整理すると、場面①は“見立て遊び”を一人で続けている T 君に対して、その遊びの状況を考慮した対応がなされている。保育者の動きをみると、一緒に遊びながら別の「遊び方」を提案、一緒に遊ぶ子を探す、誘う、という展開になっている。この場合の

保育者は、遊び相手として援助的に関わっているといえよう。ただし、援助的ではあるが、場面の状況から保育者が遊びを主導しようとするようにもみえる。

一方で、場面②については、場面①のような保護者の主導的側面はみられない。C 恵ちゃんのやり方に従う、賛同する、手助けをするなどの関わりからは、同等の仲間という立場から援助的なアプローチ行っているといえよう。

場面③は、養育者的存在という点からの関わりがみえる。Y 君に対して、声掛けを多くする、心理的距離を近くする、「甘え」を受け入れる、などは、母親的な関わりをもつような配慮であろう。

場面④は共感者（大人）としての援助的関わりである。S 美ちゃんが両親から自分の夢を受け入れてもらえなかったということを受け止め、保育者が S 美ちゃんの夢を否定せず理解を示し、現時点で伝えられる夢実現へのアドバイスを行うという部分が、共感者としての関わりになっている。

## おわりに

以上本稿では、保育における「援助」について、実際の保育場面を想定しながら求められる保育者の役割、園児への関わり方などについて検討してきた。

第1節では、「援助」の定義について、その字義の中心に考察した。この結果、「援助」概念が多岐にわたるということを確認した。これにより、「援助」概念そのものに対する新たな課題も提起された。第2節では、「援助」を見据えた保育場面の検討を行う前提として、幼稚園や保育所における保育者の役割にも言及しながら、保育における子どもの活動場面を設定した。第3節では、前節で提起した保育の場面に対する保育者への期待や役割などを明らかにするため、各場面における保育者の動きについての検討を行った。この結果、1人遊び（見立て遊び）に関わる遊びの主導的援助を行うという面、遊びのコーディネーターとなった園児への「同等の仲間」としての援助的なアプローチ、養育者的存在としての保育者、さらには共感者（大人）としての援助的関わり、などが明らかとなった。

今後の研究課題としては、まず、本稿で取り上げた保育場面以外のケースに対する保育者の関わりについても検討する必要がある。また、本稿では「保育者」という側面からの役割や期待を検討したが、小学校教育も含めた「教師」からの援助的関わり<sup>5)</sup>についても分析しなければならない。なお、これらは、現在の就学前保育諸制度や保育政策、保育者養成の実態などをめぐる動向の中で考察したい。

## 注

<sup>1</sup> 森上史朗、柏女靈峰 編『保育用語辞典』ミネルヴァ書房 2013。

保育者の援助については、「つねに幼児の成長していく姿や、幼児が生み出した活動の状況に始まり、幼児と保育者のかかわりにより状況が変化して進展していく」という点や「保育者の一方的な思い込みで幼児の生活から遊離していて援助の軌道修正が必要なこともある。したがって、幼児と生活をともにしながら、子どもの心に寄り添い、体験していることが幼児の成長に意味があり充実していくように援助していくことが必要」という点なども考慮すべきである。

<sup>2</sup> 厚生労働省『保育所保育指針解説』13 頁。

<sup>3</sup> 文部科学省『幼稚園教育要領解説』22 頁。

<sup>4</sup> 中村磐男；池弘子；牛津信忠；山口圭代表監修『標準社会福祉用語事典』秀和システム 2006 年。

<sup>5</sup> 文部科学省『幼稚園教育要領解説』24 頁。例えば幼稚園教育要領では、教師がモデルとして物的環境へのかかわりを示すことの重要性を述べ、「教師のかかわりは…幼児が学ぶべきことを学ぶことができるように援助していくことが重要」としている。